令和２年度　学校経営計画（学校評価報告書）　　国立市立国立第五小学校

◇ 専科教員を含め全教員で取り組む　■ 全教員で取り組むが成果確認は担任が行う　無印 担任が取り組む

領域	中期経営目標（カッコの数字は経営方針の番号）	短期経営目標（★教職員の取組目標）	目標達成のための方策	成果指標	7月	１０月	２月	分析	改善策	学校評議員会
学びあう子［確かな学力の向上（本年度重点目標）］	○主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善（教員の授業力の向上）（１）	①◇児童と共にめあてをつくり、見通しをもたせ、主体的に学習に向かう児童を育成する。	○単元の、また１時間の学習のねらいを明確にもつ。 ○導入や発問を工夫し、生じた児童の興味や疑問からめあてを作る。 ○児童にめあてを適時振り返らせ、学習内容と連動していることを意識させ、次の学習のめあてが考えられるようにする。 ○学習の流れの見通しをもたせるための手立てを取り入れる。	A　主体的に取り組んでいると考えている児童　90%～ 児童が主体的に取り組むための教師の授業改善に係る評価　90%～ B　主体的に取り組んでいると考えている児童　70%～90% 児童が主体的に取り組むための教師の授業改善に係る評価　70%～90% C　主体的に取り組んでいると考えている児童　～70% 児童が主体的に取り組むための教師の授業改善に係る評価　～70%	A 92%		A 91%	・年間を通し、高い水準で達成できている。高学年ほど自己評価が低いが、しっかりと自己認知しているからともいえる。学習に対して真面目に取り組んでいるという意識をもっていると考えられる。	・年度当初に研究部より授業における共通理解事項の周知を徹底する。特に児童の疑問や興味からつくるねらいの設定と明確化、授業流れの視覚化、振返りによる自分の考えの明確化を今後も大切にしていく。	・コロナ禍で、子供たちがどのように話し合い活動をしているのか気になっていたが、距離をあけたり、グループの形態を工夫したりしながら授業を行っていることが分かった。
		②◇自分の考えを伝え合い、広めたり深めたりする児童を育成する。（校内研究を核に全教科・領域で取り組む。）	○基礎的・基本的な指導事項の定着を図る。 ○自分の考えをもつ時間を確保する。 ○伝える必要性のある場を設定し、ペア・グループ・全体で考えを伝え合う時間を作る。 ○友達との考えの交流を通して、自分の考えを振り返り、言葉でまとめることで、考えの広がりや深まりに気づかせる。	A　伝え合いに関わる教師の授業改善に係る評価90%～ B　伝え合いに関わる教師の授業改善に係る評価70%～90% C　伝え合いに関わる教師の授業改善に係る評価～70%	B 77%		B 79%	・どの項目も１学期から微増している。得意な教科では積極的に学習に取り組めていても、苦手な教科や自信がない課題においては肯定的に感じることができない実態があると思われる。 ・自分で考えること、友達の考えを聞くことに比べ、自分の考えを伝えることは低い。自分から発信することに抵抗を感じる児童がいると思われる。	・１対１での対話や少人数での話し合いを意図的に取り入れることで、伝えることへのハードルを下げるとともに、体験を積み重ねることで自信をもたせる。 ・来年度も研究主題を「主体的に伝え合う児童の育成」とし、実践を通し考えていく。	・授業など学校では先生があだ名で呼ばずに「さんくん」付けで児童を呼んでいることが分かった。開放などのチームでもあだ名で呼び合うことは少なく感じる。相手のことを考えて場に応じた言葉遣いを学校として共通して指導していることが分かった。「はい。です」の指導とともに継続してほしい。
		③◇「はい・です」ができ、返事をし、「です」「ます」「思います」「からです」など、語尾までしっかりと言うことのできる児童を育成する。	○「はい・です」の掲示を各教室に掲示する。 ○呼名された際に返事をするよう各学級において指導する。 ○話の最後まで、場に応じた声の大きさで話すよう指導する。 ○よい話し方ができているときには指摘してほめる。 ○教師がよい話し方のモデルとなる。	A　身に付いた児童が、７０%以上 B　身に付いた児童が、６０%以上～７０%未満 C　身に付いた児童の増加が６０%未満	C 43%		B 64%	・呼名にきちんと返事をする児童と、しない児童に分かれている。話し合いが活発になると、むしろ言いたい気持ちが先に来て丁寧な言葉ではなくなる実情もある。	・全体で指導事項を共通して確認することで、きちんとした話し方ができるように努める。また、場に応じて話し方を変える必要があることを指導し、児童が意識できるようにする。	・国語（伝え合い）に力を入れることで、他の勉強や生活の中で生きていく。伝え合いの場面ではディスタンスをとって場の設定を工夫したい。また、プログラミング教育や外国語などの語学教育にも力を入れてほしい。
		④学年配当の漢字の読み書きと基本的な計算の仕方を身に付けた児童を育成する。	○宿題や授業の中でベーシックドリルを活用し、前学年までに配当されている漢字の読み書き、計算の練習をさせる。 ○漢字の読み・筆順・熟語の確認・繰り返し書き取り練習を毎日取り入れ継続する。 ○間違えた問題を直させることで、基礎的・基本的な計算の仕方を定着させる。	A　国語・算数の平均正答率が、それぞれ85%以上 B　国語・算数の平均正答率が、それぞれ80%以上 C　国語・算数の平均正答率のいずれかが80%未満	C 国語 72% 算数 75%		C 国語 81% 算数 78%	・漢字は日常で使うことにより、だんだんと身に付いていくと考えられるが、算数は新しい単元の学習で手いっぱいで、なかなか復習に時間がさけていないと思われる。	・間違えた問題について学習の傾向をつかみ、宿題を中心に練習の機会を作る。 ・間違えた問題についてはすぐに直すことを習慣化する。	
助けあう子［豊かな心の育成］	○自他を大切にする心の育成（２）－①	⑤◇自他を大切にする児童を育成する。	○くにごアンケート、「楽しい学校生活を送るためのアンケート（QU）」を実施することで、児童自身に日頃の生活の様子を振り返らせ、意識向上を図る。 ○くにごアンケート、「楽しい学校生活を送るためのアンケート（QU）」を実施し、結果を教職員全員で共有し、実態に合った支援・指導を行っていく。 ○日頃から、保護者と密に連絡を取り合い、児童の良さやつまずきを共有し、児童に自信をもたせるようにする。 ○道徳推進教師のリーダーシップのもと、道徳授業や道徳地区公開講座の充実を図り、自他を大切にする心を育成する。	A　くにごアンケート結果で「当てはまる・少し当てはまる」の児童が９０%以上 B　くにごアンケート結果で「当てはまる・少し当てはまる」の児童が８０%～９０% C　くにごアンケート結果で「当てはまる・少し当てはまる」の児童が８０%未満	A 91%		A 93%	・全体的に肯定的な回答が増えている。 ・教員の日常的な指導やアンケートによる意識づけ等によって向上してきたと考える。	・アンケートを継続して個々の児童の実態をつかみ、教職員の共通認識のもと継続した指導・支援を行っていく。	・校外であいさつができる児童が少ないという結果が出ていたが、見知らぬ人もいる校外であいさつするのは難しいのでは。まずは、学校内でしっかりとあいさつができることが大切だと思う。学校内で地域（学校外）であいさつの指導をするのは難しい面があるのであまりとらわれる必要はない。まずは「知っている大人に会ったらあいさつをしよう」から始めるとよいのではないか。
	○社会の一員であるという自覚と規範意識をもった児童の育成　（２）－②	⑥◇すれ違った先生や外部の方に、適切な（明確な声・一度あいさつした人には黙礼など）挨拶ができる児童を育成する。	○学期ごとに「あいさつの取り組み」を行い、各学級で設定した「あいさつ宣言」や個人の振り返りカードを活用したり、一人一人の振り返りを全校共有の掲示物に示したりして、進んであいさつをする児童の育成に努める。 ○学期ごとに代表委員会によるあいさつ週間を設定して、気持ちの良い挨拶ができるよう一人一人に呼びかける。 ○全校朝会で6年生の代表児童があいさつを行い、全校児童に手本を示す。 ○教職員が模範となり、相手に聞こえる声ではっきりとした言葉であいさつをしたり黙礼したりする等、場に応じたあいさつができるような態度を養う。	A　くにごアンケート結果で「当てはまる・少し当てはまる」の児童が９０%以上 B　くにごアンケート結果で「当てはまる・少し当てはまる」の児童が ８０%～９０% C　くにごアンケート結果で「当てはまる・少し当てはまる」の児童が８０%未満	B 84%		B 82%	・少しずつだが、あいさつの意識づけができてきた。 ・校外でのあいさつについては、意識できている児童が少ない傾向がある。	・毎学期のあいさつ月間や代表委員会によるあいさつ週間の取り組み、全校朝会の時間などを活用し、引き続きあいさつの啓発を行うとともに、学校だより、学年だより、保護者会などで地域や保護者にも呼び掛けていく。	・合理的配慮とは具体的にどのようなことが行われているのかが分かった。全てのお子さんに対して行おうとする姿勢が大切だと感じた。
	○インクルーシブ教育の理念を踏まえ、組織的な取組としょうがいがある児童への理解・支援（２）－③	⑦◇教室での合理的配慮、保護者との合意形成を大切にし、児童一人一人が居心地のよい学級（授業）となるようにする。★	○特別支援教育コーディネーターを中心に、ＳＳ・特別支援学級指導員・ＳＣ・ＳＳＷ・特別支援教室巡回指導教員等と学級担任が連携しながら、児童一人一人の課題に応じた指導を推進する。 ○つくし学級との交流及び共同学習を継続し、特別支援教育への理解啓発を行う。 ○教室では、ホワイトボード等を活用して活動の流れを示すことで学習の見通しをもたせたり、黒板横の掲示物をカーテンで覆うことで集中を促したりする等の合理的配慮に努める。 ○保護者との合意形成を大切に、学校としての合理的配慮を組織的に進める。	A　合理的配慮に関わる教師の支援・指導に係る評価90%～ B　合理的配慮に関わる教師の支援・指導に係る評価70%～90% C　合理的配慮に関わる教師の支援・指導係る評価　～70%			B 81%	・教室では、学習の流れを掲示したり黒板の横の掲示物をカーテンで覆ったりするなどの共通事項を職員全体で確認しながら合理的配慮をしている。	・個々の児童に対して、より充実した合理的配慮ができるよう、今後もコーディネーター中心に支援員等と連携していく。	・子供と話す機会は少ないが、つくし学級に来ると（つくし学級ボランティアでの下校の見守り）、子供たちの素直さに心が温まる。今のかたちが続くといいと思っている。
きたえあう子［たくましい心と体の育成］	○心身の健康づくりに努力する児童の育成（３）－①	⑧◇いじめや不登校の未然防止に努め、解決に向けて組織的に取り組む。★	○年3回「ふれあい月間(いじめ防止)アンケート」を実施して聞き取りを丁寧に行い、全職員で未然防止・早期発見に努める。 ○人権月間に、学級ごとに人権標語の作成、全校朝会での校長講話、ビデオ・ＤＶＤ教材を活用した指導を行うことで、自分や他の命を大切にしようとする児童の態度を育む。 ○5年全員とスクールカウンセラーの面談を実施する。その際、年度当初に「心のアンケート」を実施し、児童理解に努めるなど相談しやすい環境を整える。 ○不登校対応担当を中心に不登校対策委員会を設け、不登校・長欠児童の共通理解を図る。また、子どもと家庭の支援員やＳＣ、ＳＳＷと連携しながら、学習の場の提供や保護者との連携ができるように努め、解決を目指す。	A　１か月以内で、解決に向かった。 B　3か月以内で、解決に向かった。 C　解決に向けて、3か月以上経過している。	１件 対応中		１件 解決済 ２件 対応中	・軽微ないじめも細かく見取り、素早い対応につながっている。 ・社会通念上のいじめに対しては、校内のいじめ対策委員会でチームとして対応が取れている。	・引き続き日常の指導や道徳授業等を活用して未然防止に取り組んでいく。	・いじめ報告（軽微52件、社会通念上3件）軽微ないじめも含めて細かく見取り、素早い対応をしていく。校内のいじめ対策委員会にて情報共有し、組織として対応をしていく。 ・コロナ禍で子供たちの遊びが制限されているからこそ、今年度のように行事や遊び方を工夫してできるかぎりの活動を続けていってほしい。
	○基礎的な体力の向上（３）－①②	⑨基礎的な体力の向上に努める児童を育成する。	○年間８回、木曜日の中休みにﾊﾟﾜｰｱｯﾌﾟﾀｲﾑを設定し、クラスごとに、体力向上を図るための運動に、順次取り組ませる。 ○体育委員会による「ﾊﾟﾜｰｱｯﾌﾟｲﾍﾞﾝﾄ」を学期に１回以上開催し、体力向上を図った運動を、ゲーム感覚で楽しみながら行う。 ○各クラスで１年間を通して行える体育的活動を「一学級一実践」として設定する。 ○保健だよりにて、早寝早起き朝ごはんなどの大切さを伝え、保護者への意欲啓発を行う。 ○全校朝会で外遊びを促し、中休み、昼休みのどちらかは外遊びをさせるようにする。 ○１月のなわとびキャンペーンで、短縄をする。	A　休み時間に外遊びをする児童が８５%以上 B　休み時間に外遊びをする児童８０%以上 C　休み時間に外遊びをする児童８０%未満	B 84%		B 84%	・低学年が９割近く外遊びができたが、高学年は６割ほどだった。委員会活動やコロナ禍で遊びが制限されていたことも原因と考える。	・引き続き教員から声をかけたり、一緒に遊んだりして外遊びを促すよう心掛ける。 ・全校朝会で外遊びを児童に促し、年間を通して中休みや昼休みのどちらかは外に出ることを定着させたい。	・中休みや昼休みの様子を見ると、校庭でよく遊んでいる。低学年では各々の興味で遊び、中高学年では長縄跳びや集団遊びが多くなる傾向があるのではないか。遊びの様子を見られてよかった。
		⑩■保健指導（手洗い・換気）を充実させ、健康に気を付ける児童を育成する。	○休み時間後や給食前に、手洗いうがいの声かけをする。給食前に「あわあわ手洗いの歌」を流す。 ○全校朝会や保健委員会の集会、保健だよりで、手洗いうがいの意義や仕方、感染症予防について呼びかける。 ○掃除や休み時間等で窓やドアを開け、換気をする。	A　手洗いをしている児童１００% B　手洗いをしている児童９０%以上 C　手洗いをしている児童８０%未満	B 95%		B 95%	・全体として９５%ほどの達成率となった。多くの児童に手洗いの習慣がついている。 ・各学年数名、手洗いうがいを適切に行えていない児童が見られた。	・引き続き教員の声掛けや集会、お便り等で意識づけをはかっていく。	・新型コロナウイルス感染予防の職員の対策をしりたい。子供たちの感染対策に加えて、職員側のコロナ感染予防を徹底していくことが感染の広がりを抑える上で重要であろう。特に児童よりも大人が感染源になることが多いと思うので配慮してほしい。